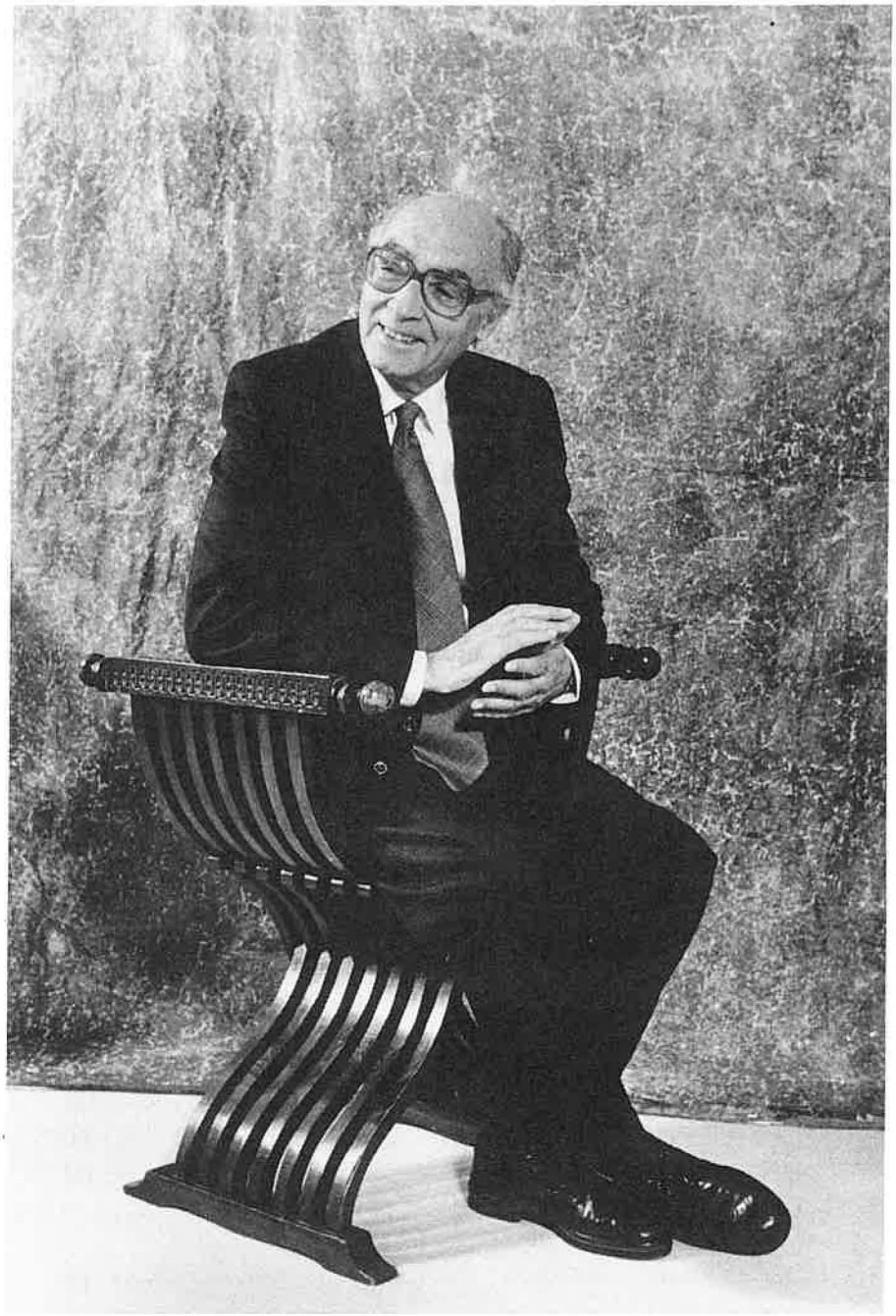
特別インタビュー

ジョゼ・サラマーゴに聞く

岡村多希子



今年度ノーベル文学賞を受賞したジョゼ・サラマーゴは、ここ数年有力候補者として取り沙汰されていて、とりわけ昨年はポルトガル内外でおおいに受賞が期待されていました。10月はじめの発表をひかえた昨年9月16日、突然、リスボンの友人ルイザからファクスが届きました。

「リスボンに来ているサラマーゴと今電話で話したところなの。あなたのことに関心をもっているタキコという友だちの日本人がいると彼に話したら、彼は言うの、特別にタキコにファクスによるインタビューに応じてあげる、今週の金曜日にランサロッテに戻り、日曜日まで自宅にいるので、そのあいだにファクスを送ってほしい、忙しいのでたくさんの質問には答えられないけれど、ノーベル賞のこと、個人的なこと、なんでもオーケー、だと。タキコはこのチャンスを逃しちゃいけないわ。是非ファクスを送るべきよ。わたしの妹夫婦がサラマーゴ夫妻ととても親しい友人なのよ」

ルイザとは私は、4年前にリスボンに滞在していたときに知り合ったのですが、彼女とは不思議な縁で結ばれていることがわかって、その後すっかり仲よしになったのです。その頃、リスボンで私は女性作家研究のための資料を収集するために、日本でいうと労働省の婦人少年局にあたる、ポルトガルの労働省の一機関である女性委員会事務局の図書室に出入りしていました。事務局の職員のほとんどすべてが女性で、彼女もそのひとりでした。毎日のように顔をあわせているうちに自然に言葉を交わすようになり、聞いてみたら、出身地はコインブラ、姓はパイヴァ・ボレオだというではありませんか。「えっ、それじゃあ、あなたのおとうさんはもしかして、コインブラ大学の言語学のボレオ先生じゃないの」「ええ、そうよ」「フェリペ・シモンイス通り29番地に住んでいたでしょう」・・・・

今から30年以上前、私はコインブラ大学でボレオ先生の生徒でした。しかも、偶然にも先生は私の下宿していた家の隣に住んでいたのでした。私の下宿先と先生の家はツイン、つまり2軒長屋になっていました。ですから、低い塀ごしに先生やご家族が家を出入りする様子がよく見えたものです。先生のほうは日本人の留学生が隣の家に下宿していることなどご存知なかったでしょうが、私のほうは一方的に先生に親しみを感じ、30年を経ても、その思い出はあざやかに生き続けていたのです。

先生のお子さんたち、ボレオ家のひとたちはおとうさんの影響でしょうか、現在、通訳、ジャーナリスト、編集者など「ことば」にかかわる職業に就いているひとが多いとのことで、しごとのことでルイザには私はこれまでにもなにかと助けられてきました。

私は、いくつかの質問をあわただしく考えて、ルイザの言ってよこしたサラマーゴのランサロッテ島の家に9月19日、ファクスを送りました。折り返し、22日に返事がきました。

以上のような事情で実現したのが以下のインタビューです。1年前のものですが、内容は今も通用するとおもいますが、いかがでしょうか。

ジョゼ・サラマーゴ氏

質問1　ノーベル文学賞についてあなたはどうお考えですか。

ノーベル賞は、単純にいえば、存在するもっとも重要な文学賞です。したがって、作家であれば、いつかは実現したいアンビションと考えるのは、当然です。しかし、作品の価値がまるで受賞するかしないかに左右されるかのように、ノーベル賞をオブセッションにするのはまちがっています。偉大な作家たちがノーベル賞をもらいました、ノーベル賞をもらわなかった偉大な作家たちもいます。もらってももらわなくても、作品の価値に変わりはありません。いずれにしても、発表の日が近くなると、無関心でいられると言える作家はいないと思いますが・・・。

質問2　ご自分の作品のなかでどれがいちばんお好きですか。どの作品がいちばんよく書けているとおおもいですか、その理由は？

その質問に答えるのはやっかいですね。自分の作品はどれも大切におもいますが、だいたいの傾向として、最近作ということになります。たぶん、制したとおもう新たな闘いをあらわしているからでしょう・・・。現時点では、いちばん好きなのは最近出版した本――「盲目についてのエッセー」と、10月にポルトガルで出版予定の最近書いた本――「あらゆる名前」です。「よく書けている」というのは、おわかりいただけるとおもいますが、相対的なものです。1982年に発表した「修道院回想録」のような作品がそのバロックがかった文体で「よく書けている」と言うことができるとすれば、地味なやりかたで語られる「あらゆる名前」についても、文体上の相違は非常におおきくはありますが、おそらく、同じことが言えるでしょう。

質問3　これから出る「あらゆる名前」ですが、あなたは、JLのインタビューで、この作品は夭折したあなたのおにいさんのことを書くのだと言ってたことがありますが、作品のメッセージはなんですか。

それはちょっとちがいます。わたしは、兄の死の状況を調べる必要がなかったとしたら、この作品は存在することはなかっただろう、と言ったのです。でも、この本はその件を扱っているのではありません。この小説の中心テーマは、簡単に言えば、「他者の探索」です。

質問4　予告されている「誘惑の書」はいつになるのでしょう。

「誘惑の書」は小説ではなく、わたしの14歳までの「自伝」です・・・。「あらゆる名前」のあと、今書こうとしていたのですが、別の作品の構想が浮かんだものですから、こちらはもういちど延期しました。

質問5　日本について関心がおありですか。おありだとしたら、日本のどのような点にですか。

興味があるのは、伝統的日本文化、とくに、近代世界との日本のかかわりです。つまり、現在の「西洋化」のプロセスが日本文化の歴史のなかにどのように（平和的に？、それとも葛藤をともなって？）組みこまれてきつつあるのか、ということです。

質問6　日本文学をなにかお読みになったことがありますか。おありだとしたら、どの作家ですか。ご感想は。

わたしが知っているのは文学よりも日本映画です。作家で読んだことがあるのは、川端と大江だけです。

質問7　私ども日本人になにかメッセージがありますか。あったら、おっしゃってください。

お互いにますますよく知り合い、尊敬しあいましょう、と申し上げるだけです。

質問8　お子さんとかお孫さんがおいでですか。その方たちにどんな未来をのぞんでおいでですか。

娘ひとりと孫ふたりがいます。孫たちにどんな未来が待っているかわたしにはわかりません。わたしたちは、ひとつの文明の終わりに来ています。来世紀がどんなものになるのか、今わたしたちが立ち会いつつあるこの情報革命にはじまる、かいま見える科学技術上の変容によってどのような「人間」が「生産」されることになるのか、まだはっきりしていないと思います。孫たちがしあわせであってほしいとねがっています。予告される新しい世界で彼らがそうなることを、わたしは疑わしくおもってはいますが・・・。

（1998年12月17日記）